

現代語版『小説神髓』（十）

坂井 健

はじめに

『小説神髓』は、ごく簡単な擬古文で書かれているのだから、わざわざ現代語訳する必要はないし、近代文学を勉強しようとするものなら、当然、原書にあたって勉強するべきだというのは、なるほどそのとおりだとは思いますが、実際に、『小説神髓』を原書のまま読んで、正しく理解できる人は、大学四年生くらいでもごく少ないし、とくにこの本を読んでほしいと思う、大学二、三年生ではほとんどいないといってもいい。そこで、いくらか無駄な仕事に属するかもしれないけれど、あえて『小説神髓』の現代語訳をすることにした。訳にまちがいや不適切な表現があるかもしれない。識者の叱正を乞う。

なお、注は、日本近代文学大系『坪内逍遙選集』（中村完注釈、角川書店、昭和四九年一〇月）、岩波文庫『小説神髓』（宗像和重解説、二〇一〇年六月）に詳細な注があるので、ここでは最小限にとどめた。また、柳田泉『小説神髓』研究』（春秋社、昭和四一年）に詳しい解

説がある。これらの先行研究にはさまざまに教えられるところがあったので、記して、感謝の意を表したい。柳田氏の著作には、本文の解釈に相当する部分があるが、本稿では、なるべく直訳を心がけた。

日本近代文学大系は、『逍遙選集』別冊第三を底本とし、初版本（松月堂、明治一八〇一―一九年）を参照したとある。なお、柳田泉氏による岩波文庫本に初出と『逍遙選集』の異同についての注記があるほか、宗像和重氏の解説本は、『逍遙選集』を底本とし、初出との対照表を付している。

本稿では、若き日の逍遙の口吻を髣髴とさせたいと思い、初出本に拠った。本稿は、『小説神髓』を原文のままに理解したくても、できずにもどかしがっている初学者を念頭において訳したものである。

（前号よりの続き）

音韻転換も意義転換も、無理に筆を曲げた跡がその文章の上に現れて、作者の苦心があらさまに他人に見られるのは、じつに拙い。そ

うじて、こうした掛詞や縁語を使いたいときは、まず、第一に、轉換の具合が平易で滑らかなものを求めなければならない。言葉を換えていうなら、ふつうの読書眼のある人が、ただ一通り読んだだけで、その轉換がもたになっているところが、よく理解できるように書くべきである。もつと巧妙で実に込み入った轉換でも、もう一度読んでみるとすぐに読者に分かるように書くべきなのだ。そうでなかったら、どんなに巧妙な轉換であっても、読者がその意味を理解しにくくて苦しむようであれば、おもしろくない。ただ、おもしろくないばかりではなく、そのすべての文章の意味さえも、そのために分かりにくくなることがあるだろう。自分の友人何某⁽¹⁾がかつて言ったことには、轉換法は、まことに優れた文章の表現法であつて、地の文でこれを用いるなら、西洋の国々の文章にも、いまだに知られていない妙趣があるが、これを人物相互の会話に使うことはとても不都合なことではないか。なぜかという、掛詞や縁語は俗にいう洒落というものに似ている。というの、前にもあげた、

「短き蘆のふしあわせ、逢ずなりしをうらめしの、近江とはたが名附けん。」云々の文中にある「近江」の字は「逢」から転じた洒落ではないか。このような悲哀の言葉の中に洒落をまじえるのは不都合ではないか云々といっていた。私は答えている。そうではない。このような洒落は用いても悪くはない。なぜかという、非情の地名でさえ恨めしく思つて、なげくところは、かえつて淡い乙女的情合らしく見えて、意地らしいからである。このような例は、世の中に実際にあることである。むかし、イギリスの詩人にウィザー⁽²⁾にがし⁽²⁾という人がいた。

あるときその家運が衰えたのをなげいて詠んだ詩に、
「凋むてふ名にもしるしやわが宿にかかるなげきの秋を見むとは
(しほむという名前にもはつきりとしていることだ。私の家にこのような悲しい秋がやつてこようとは)」

「The very name of wither shows decay (ウィザー(凋む)という名前のとおり、家運は傾いている。)⁽³⁾」

といっている。また、我が国では、源三位頼政が平等院で芝生に座つて、今にも切腹をしようというときに、辞世の句にといつて

「埋木の花さくこともなかりしに身のなることぞ悲しかりける。

(埋木の花が咲くことのないように、世に出ることもなかった我が身であるのに、このような身の果てになつてしまったことは悲しいことであるよ。)⁽⁴⁾」

と詠まれたようなものも、いわゆる洒落をまじえているが、その痛切な趣においては、通常の言葉にまさると思われる。

ちなみに言う。轉換法はおおむね言葉が冗長になるのを省くためとつたが、ときには轉換法を用いて、かえつて冗長になることがある。たとえば、

「別れし後ぞうき事を、「黄楊の小櫛の」告る間も、無き世がたりにならんとは、思ひがけなや、「黒髪の、神ならぬ身ぞ是非もなき。」(別れた後も、つらいことを黄楊の小櫛の「つげ」ではないが、辻占が告げてくれる間もなく世間の評判になつてしまふうとは、思ひがけないことであつたが、「黒髪の」の「かみ」ではないが、神ならぬ身の是非のないことだ。)云々。

「黄楊の小櫛」並びに「黒髪」の文字は、すなおに文章を書いていくときには不要のものである。それを「告げる」に掛け、「神ならぬ」の掛詞にするために用いているのは、不要な技巧である。思うに、文章に装飾を添えようとしたものにほかならない。筆者の考えでは、このような掛けことばは、なるべく用いないようにして、文章に必要な装飾のようなものは、ほかの方法に求めることが大いに望ましいことであろう。その理由は、読者の現実であるとの感覚を失わせるのではないかと恐れるからである。

古い歌を引用する方法は、古代の物語でもっとも多く見られるところである。古人の詩歌の一部を引いてきて、地の文章の助けとし、かつ、修飾を与える方法である。

「月おぼろにさし出て池ひろく山こぶかきわたり心細げに見ゆるにも住はなれたらん岩ほのなかおほしやらる。(月がおぼろにさし出でて、池は広く、山の木々が深いあたりが、心細そうに見えるにつけて、世の中から離れた岩の洞窟をお思いになられる)云々。(『源氏物語』須磨の巻)⁵⁾

「袖まきはさん人もなき身にうれしころざしにこそはと宣たまひて(添い寝をして、涙にぬれた袖を絡みつけて乾かしてくれる人もない身にとつてうれしいお心であるとおっしゃって)、云々。(『同前』末摘花)⁶⁾

右の第一の文中にある「岩ほのなか」云々は「いかならんいはほの中に住まばかは世のうきことのきこえこざらん(どのような岩の洞窟に住んだなら世の中の嫌な事を聞かずに済むことであろうか)」⁷⁾とい

った古歌の一部を借用して、地の文章の言葉を省いて、言外に意味を含ませているのである。また、第二の文中にある「袖捲き乾さん」云々は、「淡雪はけふはな降りそ白妙の袖まきはさん人もあらなく(淡雪よ、今日は降らないでおくれ。白い袖を絡みつけて乾かしてくれる人もいないのだから)」⁸⁾といった古歌を借用して、言葉の文句を省いたのである。漢詩を引用した場合もたくさんあるだろうが、今は記憶の中にないで、ここにはその例をあげないけれども、そのだいたいの様子を言うならば、まず、人物の形容などを地の文でなるべく細かに写し出したうえで、まだ足りないと思われるときには、その形容にふさわしい古人の詩句を抜き出して、その趣きを補うのである。

西洋の小説文にこの方法を用いる者は非常に多い。景色を写したのちに、「まさにこれは」の二字を置いて、自作の漢詩を掲げるのも同じ趣のことではあるが、古詩を用いて雅な趣があるものには劣っている。題目構成の方法は、別に一定のきまりもないので、作者の随意であるのは勿論であるけれど、参考のために一言をここに費やしたい。あの中国の小説にならって、対句のような漢文を二行に並べるのは、古臭くなってしまう。かといって、「第一回何々のこと」などとあからさまに掲げるのも、あまりにも興の薄いことであることだ。西洋には古人の詩歌を抜き出して題目の代わりとすることもある。わが国にも古人の発句を引用して題に代えた作者もあつた。後の二者はじつに面白い趣向かと思われる。題目などのようにしても良いようであるが、また、退いて考えてみると、読者の注意を引くための一つの方便と思われるので、それなりの新たな工夫を、題名をつけるのにも凝ら

すのが良い。

筆者は、前段で雅俗折衷の読本の文体の文例をあげるといって、馬琴の文だけをあげたので、中には誤解して、馬琴翁の文を学べといったのだと思うものもあるだろう。それははなはだしく筆者の意見とちがっている。筆者は、ただ雅俗の折衷の加減を示そうとして、馬琴翁の文を引用しただけである。けっして馬琴翁の文をお手本にしなさいといったのではない。馬琴翁はまったく雅俗折衷体の大家であるが、あの馬琴調の文のようなものは、馬琴だけが独り書くことのできる文体なのであって、後代の人が学ぼうと思っても学ぶことのできない文体なのだ。無理に学ぼうとするなら、かえって問題が起きる。ただ、雅言と俗言との折衷の加減にだけ注意して筆を運ぶのが良い。もしそうでなくて、馬琴の文だけを学ぼうとすれば、例の鑄型の文となって、筆の動きの進退も思うようにならず、ちょうど目隠しをして盃に酒を注ぐような不都合が起きるだろう。雅俗の分量を標準として文を綴るのは、ちょうど酒に水を調合するようなものだ。目隠しをして酒を注ぐとすると、ひよっとしたら盃からあふれるのではないかと恐れて、少しずつ注ぐようなものだ。そうでなかったら、あふれて席を汚すことがある。足りないのはもとより拙く、席を汚すのはますます見苦しい。酒に水を足すのには、その標準の分量がある。分量の加減は、酒の風味を失わないように程度にすればよい。下戸に飲ませる分には少し水を多くし、上戸に飲ませる分にはさらに水を減らすのが良い。そして、その加減は、ただ作者の心にあつて、他人の指図を必要としないので、自分で味わい、自分で試し、そうして分量が適当かどうかを

自由に考えて決めるべきである。酒は、すなわち雅言である。水は、すなわち俗言である。雅俗折衷の秘訣は、酒と水の加減のようなものだ。折衷文を愛する作者は、この意味を味わうべきである。

ちなみに言う。筆者の友人何某が、かつて言ったことがある。自分をつくづくこの頃の小説家を見ると、おおむね馬琴に心酔するものが多い。そのため、その文はひたすらに馬琴翁の文を真似て、餓えたような文があり、瘦せたような文がある。はなはだししいのは、まったく死んでしまったようなものもあることだ。まったく馬鹿げたことではないか。馬琴翁は、『源氏物語』、『平家物語』、『太平記』、『水滸伝』、『西遊記』などの文を折衷して、あの一大機軸をつくりだしたので。いわゆる馬琴翁が自分で会得した文であつて、杜撰なところもあれば、こじつけもある。とはいっても、馬琴翁のこじつけや杜撰さは、翁の自在の才筆によって臨機応変に書いたものなので、時によっては、こじつけや杜撰さもかえって不思議に魅力的なところもある。思うに、翁が自在の才筆によって自分で加減したからなのだろう。それなのに今の作者たちは、そのあたりを少しも考えないのか、それとも力が及ばないのか、良いところも悪いところも馬琴をまねて、翁の杜撰な文句をさえ手柄顔にとりだしてきて、そのようにしてはいけない文句の続きに、むりにはめ込もうとする者がいる。まったくひどい誤りではないか。小説の文を学ぼうとするならば、翁の根柢地にさかのぼつて、『源氏物語』、『平家物語』、『太平記』などを読み味わつて、その上であらたな文体を工夫するのが良い。『源氏物語』、

『平家物語』などは、実に名文の傑作である。これらを取りあげてさらに折衷の文を作るならば、むなく馬琴翁だけを小説文壇に勧めるべきであろうか、いや、そうではない。馬琴を学ぶならば、かりにその精髓を会得することができたとしても、結局、馬琴の二番煎じに過ぎない。その上に出ることは難しい。昔の小説文を取りあげて新たに折衷の文を作るならば、その文は一家の文である。他人の文ではない。馬琴の文と対抗することもでき、また、それをしのぐこともできる。じつに楽しいことではないか、と言ったことだ。まことにそのとおりであるよ。

(乙) 草双紙体は雅俗折衷文の一種であって、それが読本体とちがっている理由は、たんに俗諺を使うことが多いのと、漢語を使うことが少ないところにある。だから、壮大で豪壮な様子の形容をのべるときに、例の雅文体と同じ不便・不如意を感じることがある。とはいっても、漢語を用いることを、とくに嫌うというわけでもないのです。これからこの文体を用いる作者は、その時々便宜に応じて多少の漢語を取りいれて、先ほどの不都合を補うとしても、けっして不都合はないだろう。思うに、この文体の文章で、漢語をなるべく使わないようにしたのは、仮名文字だけで書いているので、読者がこれを読んだ時に分かりにくいのではないかと思つたからだろう。しかも、草双紙というものは、もっぱら女子供などの楽しみのために作られたもので、なるべく漢語を使わないようにしたのも、当然のことと言えるだろう。

草双紙文体にも、さまざまな種類があつて、あるものは読本体とほ

とんど同じようなものもあり、あるものは俗文体に近いものもある。たとえば、山東京山、柳亭種彦の文章には、おもに上方の俗言を用いて草双紙の台詞を綴っているが、柳下亭種員、または、万亭応賀などは、おおく雅語をまじえて使っている。次に、二、三の文例を挙げる。よく読んで、そのちがつているところを見てほしい。

「それおそばへと突遣られ、深雪ははたとこけかかり「マア兄さんの悪らしい、斯うくくらずとも可ことを、嘸かしお手が痛みませう、ぶしつけながら」と結び目の、堅きに齒までてつだふて、漸々ほどけば權三もにつこり「まちがふてその後は、とんとお目にかかりませぬ、健むしやでお目でたい、又そのうちに」と立つのを引とめ、(乳母のお室に)「それおそばへ、と突きやられ、深雪は、ばたりと転びかけ、「まあ兄さんの憎らしいこと。こんなに結ばなくてもいいものを、さぞかしお手が痛むでしょう。ぶしつけながら」と結びが堅いので、齒まで使つてやつとほどくと、權三もにつこりして、「まちがつてその後は、少しもお目にかかりませぬお元気で結構です。またそのうちに」と、立つのを引きとめて」云々。(種彦)¹⁰

「村荻あたりを見回して、料紙硯を取いだし、墨すりながすその処へ何心なく来かかる夏野「おあついのは何処へのおふみ、もう黄昏でお暗からう、お手燭あげませう」と声かけられてふりかへり「久しう居やる其方には、何もかくす事はない、君吉さまがこのおふみを持てござつて、母さまへあげよう、いいや取るまい、とあらそふてござるやうすを遠目に見たゆゑ、お兩人ふたりのおつしや

る事は聞えねど、どうした訳かとおとどめまをし、取上げてつくづく見れば、当名の処へちらしがき、風になびかぬ村萩のもとへとあるは、光氏さまより妾の処へ来たおふみ、年のゆかぬあの子が取違へて、母さまへ持ておいでなされたれど、いいや、それは娘ぢやと流石にあなたもおつしやりかね、ひよんな事でやりつかへしつ、妾が目にかからぬと毫末はてはつかぬところ。(村萩はあたりを見回して、料紙と硯を取り出だし、墨を摺り流すそのところへ、何とはなしに來かかった夏野から「お暑いのにどなたへのお手紙ですか。もう黄昏で暗いでしょうから、手燭を差し上げましょう。」と声を掛けられて振り返り、「長く仕えているあなたには、何もかくすことはない。君吉様がこの手紙を、持つてらっしゃって、お母様にあげよう、いいや、もらわない、と言いつつてございます様子を、遠目に見たので、二人のおつしやつていゝことは聞えないけれど、どうしたわけかとおとどめ申して、手紙を取り上げてつくづく見ると、宛名のところへ散らし書きで、「風に靡かぬ村萩のもとへ」とあるのは、光氏様より私のところへ来たお手紙。年のいかないあのお子が、まちがつてお母様へもつておいでなされたけれど、いいやそれは娘じやと、さすがにお母様も仰いかね、ひよんなことでつきかえした。私の目に入らなると、とんと決着のつかないところだった。」云々。(同前)

右の二文章のようなものは、ひじょうに俗言を多くまじえているものである。そして、その俗言は、昔の江戸言葉に似ているよりは、むしろ上方言葉に似ているものである。思うに、上方の言葉のようなもの

のは、非常に雅言に近いので、地の文と台詞との食い違いをなるべく少なくして書こうとして、作者が注意したものであろう。

「いないなそれは偽言ならん、姿は賤しくやつすとも阿女は正しく匹婦にあらず。あまつさへ女子にげなく、心のうちに大望を、思ひたつ身とみたは僻目か。おのれは年比世の人を、相することを修行なし、その術妙を得たるゆゑ、最前おことが街道に、馬ひきながらたたずむを、一みみるより凡人ならぬ、者とは早くも見極めて、窃かに問ふべき事あれば、すすむる言葉をさいはいに、馬かりうけしも人とだえし、このあたりに來りし上、素性を問はん為ぞかし。(中略)と言葉を尽くしていふをきき、少女はしばし黙然たりしが、ややあつて泰然と形をあらため、翁にむかひて、おん身が明察感じ入る。星をさしたるそのことば、今はつつまん要あらねば、いかにも実を告ぐべきが、それより先き妾もまた、おことに乞はんものこそあれ、きき入れてたまふべきや、と言葉もにはかにあらたまり。(いやいやそれは嘘でしょう。姿は賤しくやつしていても、あなた様は決してただの女ではないでしょう。そのうえ、女にふさわしくなく、心の中に大望を、思いつている身と見たのはまちがいでしょうか。私は日ごろこの世の人の人相を見ることを修行して、その術は妙を得たものであるから、先ほどあなたが街道に、たたずんでいるのを、一目見るより凡人ではないものと早くも見極めて、ひそかに聞きたいことがあるので、馬に乗るのを勧められたのを幸いに、馬を借り受け、人通りも途絶えたこの辺りに來たうえで、素性を問おうとしたか

らである。(中略)と言葉を尽くして言うのを聴いて、少女はしばらく黙っていたが、ややあつて泰然と態度をあらため、翁に向かつて、あなたの御明察感じ入ります。凶星を指したその言葉、今は隠す必要もないので、いかにも事実を告げましょうが、それに先立って、私もまた、あなたにお願いしたいことがあります。聞き入れてくださいますか、と言葉もにわかにはあらたまり。」云々。

(種員)⁽¹²⁾

「伊達五郎その儘たはずみ、五人のものの潜びたるくさむらにきつと目をつけ、何事かいはんとせしが、思ひかへす由やありけん、傘うちひらきふりかたげ、声さへいと高々と、このものどもを手の下にくつは如何なる鬼神か、人間業にはよもあらじ、とわづかに謡ふ熊坂に、ふりさけ見ればなぎなたの、形に似たる月影は、雨後の雲間に研ぎだされ、ここに青墓^{あおはか}あらなくて、旅のやどりはあなたぞと、あゆまんとして二足三足、よろめきながらふみとどまり、呵々^{かちかち}と高笑ひ、裕々としてあゆみゆく。(伊達五郎は、そのままたはずみ、五人のものが潜んでいる草むらにきつと目をつけ、何事かを言おうとしたが、思い返すわけがあったのだろう、かさをうちひらいてふりかたむけ、声さえ実に高々と、「このものどもを手の下にくつは如何なる鬼神か、人間業にはよもあらじ」とわずかに謡う熊坂に、振り仰いでみると、なぎなたの形に似た月の姿は、雨のあとの雲間に研ぎだされたように輝き、ここは青墓ではないけれど、旅の宿りはあちらであると、よろめきながら踏みとどまり、からからと高笑いして、悠々と歩いていく。)⁽¹³⁾」

云々。(同前)

右の二つの文章のようなものは、ほとんど読本体と区別することができるものである。種彦翁でさえも、『偽紫田舎源氏』の文章には多く雅語をまじえて使つて、地の文と台詞を綴りだしている。思うに、草双紙の文章には近代の俗語が多いので、もっぱら俗語だけを用いるときには、時代の違つた人々や物事のありさまを叙述するのに不都合があるからだろう。

結局のところ、草双紙体は現代物語の文章には至極適当なものだけども、時代物語を描くにはいまだ適当であるとは言えない。何故かという点、すでに前にも論じたように、足利時代、あるいは、また、保元のころの人の言葉を、田舎言葉や俗語で書いたならば、ただ何となく、偽物じみて、その情合が移らないばかりでなく、また、この間の田舎言葉、俗語では言うことのできない言葉もあるだろう。思うに、昔の人情、風俗は、今とはじつに異なるものであるから、そのふだんの言葉のようなものも、またしたがって異なるからである。かりに、また、作者の才筆によつて、巧みにこうした不都合を覆い隠すことができたとしても、別にもう一つの不都合がある。これをまったく除こうとすることは、決して望むことのできないことなのだ。たとえば、草双紙の作者たちが時代物語を書くにあたって、豪傑あるいは紳士などの言葉を描き出そうとするときは、だいたい雅語をまじえて、「そなた」というべきときも「おこと」と言わせ、「こうこうしやれ」というべきときも「こうこうし給え」などと言わせなどする。ところが、下流の人物の男女の中には「ござんせ」という言葉もあり、

「憎らしい」という言葉もある。結局のところ、下流社会は、だいたいいにおいて現代物語の趣があつて、他の時代の形に作つて書いた上流社会の趣とはまるで雲泥のちがいがあつて、よくよく考えて読んでいくならば、同国人とも思われぬし、同じ時代の人間とも思われぬ点が多い。だからといって、このような不都合をなくするために、下流の人物の言葉の中に多く雅語をとりまじえて、その言葉をさえ描き出したならば、例の読本体の文となつて、草双紙体に特別にある長所を失うことになるだろう。これもまた惜しいことである。

(以下次号)

[注]

- (1) 友人何某・未詳。
- (2) ウィザーなにがし・George Withler (一五八八—一六六七) イギリスの詩人。
- (3) (渾む) という名前のとおり、家運は傾いている・英語の wither が「しほむ」という意味をもつことと、自分の姓の wither をかけている。
- (4) 埋木の花さくこともなかりしに身のなることぞ悲しかりける・『平家物語』巻の四「宮御最期」で源頼政が自害するときの辞世の歌。「花」と「身(実)」は縁語。
- (5) 月おほろにさし出で池ひろく山こぶかきわたり心細げに見ゆるにも住はなれたらん岩ほのなかおほしやらる・『源氏物語』須磨の巻で源氏が花散里のもとを訪れる場面。花散里の邸内の庭の荒れたさまに、源氏がこれから行くであろう自分の将来の住みかを重ねてみている心情を描写している。
- (6) 袖まきほさん人もなき身にうれしころざしにこそはと宣たまひて・『源氏物語』「末摘花」で、末摘花が源氏の正月の晴れ着に添えて贈つた「からころも君が心のつらければたもとはかくぞそぼちつつのみ

(あなたのが冷たくてつらいので、私の袂はこんなに涙にぬれています。)」という歌を受けて、古歌を踏まえながら、冗談交じりに、感謝の気持ちを言い表す場面。

- (7) 『古今和歌集』雑歌一八下。
- (8) 『万葉集』巻一〇冬・雑歌。
- (9) 対句のような漢文を二行で並べる・たとえば、『金瓶梅』第一回は「西門慶十兄弟を熱結す／武二郎親哥嫂を冷遇す」(『金瓶梅』巻一、春風居士訳述、兎屋誠、明治一五年一〇月による。)のようなものを指す。なお、逍遙の『当世書生氣質』も、「第一回 鉄石の勉強心も変はるならひの飛鳥山に／物いふ花を見る書生の運動会」のように、漢文ではないが、同じ形を踏襲している。
- (10) それおそばへと突遣られ…立つのを引きとめ・柳亭種彦『邯鄲諸国物語 播磨の巻』ヒロイン深雪が、兄に両手を縛られた恋人の権三の縄をほどく場面。遠慮して恋人のそばに近づこうとしない深雪のことを、乳母のお室がじれつたがって、深雪を権三のそばへと突き飛ばすところ。
- (11) 村萩あたりを見回して…妾が目にかからぬと毫末はてはつかぬところ。・柳亭種彦『修紫田舎源氏 第三編』・主人公光氏(みつうじ)が方違えに家臣の家に宿泊し、娘の村萩との面会を希望するが、たまたま不在だったので、年の近い義理の母空衣が村萩に扮して面会する。光氏は、良人のいない娘の村萩と思い込んで肉関係を要求するが、良人のある身である空衣は受け入れなかった。それを心残りに思った光氏が、召し出して寵愛していた空衣の弟君吉に託して、艶書を送る。君吉は、源氏の思い人が空衣であることを知っているので、空衣に渡そうとしたが、空衣は受け取らない。そこへ村萩が現われて艶書を取り上げ、読んでみると自分への宛名があるので、返事をしようとしているところへ、腰元の夏野が声を掛ける場面。
- (12) 柳亭種員『白縫譚』上巻二十一編。滅ぼされた大友宗麟の娘ヒロイン若菜姫が馬子に身を窺っているのを、大友宗麟の遺臣で人相見にたけた大内伝内がその正体を見破り声を掛ける場面。

(13) 柳亭種員『白縫譚』上巻二十三編。親思いの力士三笠山伊達五郎に毒を盛ろうとする計略が露見し、土俵上でも散々打ち負かされた悪人力士大蛇川鱗太夫が遺恨を晴らそうと、草むらにひそんで待ち受ける場面。この直前には、鱗太夫の兄が闇討ちを掛けるが、伊達五郎に投げ飛ばされる場面がある。残った鱗太夫一味五人を打ち倒そうとするが、思いかえず場面。

「このものどもを手の下にくつは如何なる鬼神か、人間業にはよもあらじ」は謡曲『熊坂』の一節。盗賊の頭、熊坂長範が自分の手下を次々と打ち取っていく源義経に対して何者かと恐れる場面。熊坂長範は、義経が金売り吉次と奥州に下る際、青墓の宿でその黄金を奪うため、長刀をもって義経一行を襲ったという設定になっており、「なぎなたの、形に似たる月影は」、および、「青墓にあらなくて」は、それを踏まえた描写である。

(さかい たけし 日本文学科)

二〇二〇年十一月十六日受理

